

## 闘病記感想文入力用紙

つくり、  
つくりかえ、  
つくる。

図書館内にある図書を読んで、1,200字以内で感想をまとめて下さい。

書名：患者になってみえる看護：難病が教えてくれたこと

著者名：長濱 晴子

出版社：医学書院

発行年（西暦）：1996/8/1

学籍番号（224-21017） 氏名 川上 智也

『患者になってみえる看護』を読み、私は「看護とは何か」という問いに改めて向き合うことになった。著者は長年看護師として働いた後、自らが病気を経験し、患者の立場に立つことで、これまで気づかなかった看護の在り方を深く考察している。その語りは看護学生である私にとって大きな学びであり、自分の将来像を見つめ直す機会となった。

著者は、看護師として勤務していたころには気づけなかった「患者としての視点」を赤裸々に綴っている。医療者にとっては何気ない言葉や態度が、患者にとっては大きな安心や、時には深い不安を生むことがあるという指摘には強く心を動かされた。看護の現場では、技術や知識に意識が向きがちだが、患者はそれ以上に「自分が大切にされているか」を敏感に感じ取っている。看護師のさりげない声かけや表情が、患者の心にどれほど影響を与えるのかを知り、看護の本質は「人として寄り添う姿勢」にあるのだと実感した。

また、著者は患者としての生活の困難さも丁寧に描いていた。治療の副作用や入院生活の制約は、身体的な苦痛だけでなく、その人らしい生活や尊厳をも揺るがす出来事である。私はこれまで病気を「症状」としてとらえることが多かったが、その背後には「一人の生活者」としての思いや願いがあることを忘れてはならないと学んだ。看護師は患者の苦痛を軽減するだけでなく、その人が自分らしく生き続けられるよう支援する役割を担っているのだと強く感じた。

さらに印象に残ったのは、著者が「説明を受ける立場」となったときの戸惑いである。専門用語が多く、十分に理解できないまま治療を選択しなければならぬ状態に、不安と孤独を覚えたと記されていた。看護師としての経験を持つ著者でさえそう感じたという事実は、患者にとって医療がいかに不透明で心細いものかを物語っている。だからこそ看護師は、患者が納得し安心できるように、わかりやすく説明し、そばで支える存在でなければならないのだと痛感した。

私は「患者と看護師の距離」について考えさせられた。看護師は専門職として患者を支える一方で、人としての教官や温かさを失ってはならない。著者が患者として「ただそばにいてくれることが救いになった」と語る場面から、看護師の存在そのものが患者の安心に直結していることを学んだ。看護は決して特別な行為だけで成り立つものではなく、相手の苦しみに共に寄り添う姿勢が基盤にあるのだと思う。

私はこれまで、看護師になるために技術や知識を学ぶことに必死で会った。それらはあくまで患者を支えるための手段に過ぎず、看護の本質は「相手の立場に立って考え、行動することにあること」にあると気づかされた。患者としての視点を忘れず、相手の不安や孤独に敏感に気づくことができ、知識や技術に加えて、人として寄り添う温かさを大切にしながら、患者とその家族に安心を届けられる存在になりたいと強く思った。